

2005年度 国庫・県費補助事業 **かん山古墳4次調査**

2006.3.31

大和高田市教育委員会

1. はじめに

大和高田市教育委員会は、大前方後円墳・築山古墳に近接する、5世紀前半築造の直径50mの大型円墳・かん山古墳の範囲確認調査を2002年度から実施してきた。

当初は3カ年の予定であったが、昨年度実施した3次調査で、墳頂部に大小2基の墓坑の存在を確認、さらに大型墓壙（第1主体部）側に穿たれた盗掘坑底に断面半円形の棺床とコウヤマキ製の割竹形木棺の棺身が残存していることが判明した。このため、関係機関や有識者で構成する整備委員会で協議し、急遽調査を1年延長して、木棺を含めたこの主体部の情報を可能な限り収集していくことにした。



かん山古墳の位置 1/10,000

2. 調査の成果

今年度の調査は、墳頂部に範囲を限定する一方、対象は問題の第1主体部に絞って実施した。しかし予算等の制約により、具体的な作業としては、墓壙内の盗掘坑の覆土から、攪乱された遺物を取り出し、保存処理を手掛けていくこと、および木棺の保存に主眼を置くこととなった。

第1主体部の墓壙は、平面10.5m×8.6mの長方形を呈し、この時期の古墳に相応しく、長大な木棺を納めるために十分な規模である。また断面は逆台形を呈し、棺は割竹形木棺が1基のみ棺床に安置され、粘土槨が構築されている。現墳頂から棺床までは、約2.2mの深度にもおよぶ。

これまでは、第1主体部の範囲内に老朽化したコンクリートベンチや石碑などがあり、調査や古墳の保存上障害となっていた。昨年それらを調査の終盤に撤去、移動させることができたため、今年度はまず、第1主体部全体の再検出作業に取り組み、遮るもの無く墓壙を検出し、問題の盗掘坑の輪郭を明確に検出することから行った。

盗掘坑は、墓壙の輪郭から外れることなく、中軸線に従って平面楕円形に現れた。坑の全長は7.3m、幅は最大で5.3mにおよび、墓壙は両端部こそ被害を免れていたものの、かなりの部分が盗掘・攪乱された状況であった。盗掘行為は、まず墓壙中心よりやや北側に坑本体より広めの縦穴を掘り、棺床や棺身に及んだところで、棺内の副葬品だけを採集しながら、棺床・棺身を壊すことなく、やわらかい棺内覆土を横に掘り進んでいくという手順でなされていったようである。



かん山古墳平面図

この盗掘坑について、昨年度の調査では、墓墳の規模、構造を調べるためのトレンチを覆土に設定、掘削したが、今年度は平面的には昨年設定したトレンチから南側すべてと、立体的にはその範囲における棺床肩部の上面付近までを調査、掘削の対象とした。掘り上げた盗掘坑覆土からは、目視で遺物を採取していく一方、すべての土を篩いにかけて、細かな遺物の採取に努めた。

棺床の外側に当たる部分では、複数の箇所鉄刀が確認され、うち数点は断続的に細長い刀身を覗かせた。棺外であることや棺の主軸に平行して刀身が横たわっていることから、盗掘被害を免れていると思われ、基本的に副葬当時の原位置を保っているものと考えられる。

また昨年検出した木棺については、取り上げずに現況での保存策を講じるために、昨年設定した第1トレンチ内での再検出のみ行った。

盗掘坑覆土を予定の深度まで掘削したのち、棺の遺存している範囲をある程度確認するために盗掘坑南端部付近で平面130cm×110cmのサブトレンチを設けた。このトレンチでも、盗掘被害に遭いながら、原型を保っていた棺床を検出できたが、棺材や、粉化した材、置換粘土など、棺の痕跡を示すものも検出できなかった。このサブトレンチの端部から、棺身に至るまで約4.2mあり、残存している木棺はこれよりも短い長さにとまることになる。

棺床の中央部分では盗掘時に開けられた最大幅約70cm、深さ約30cm程度のすり鉢状の穴が見つかり、ここから銅鏡の粘土押型や漆皮膜だけを残した楯の破片が出土した。またこの穴の見つかった箇所より南側の棺床は、盗掘を免れた状態で検出できた。棺床に蓋材の被覆粘土がいくつかの塊となって落ち込んでおり、粘土と棺床との境界には朱が筋状に挟まった状態になっている様子を観察できた。

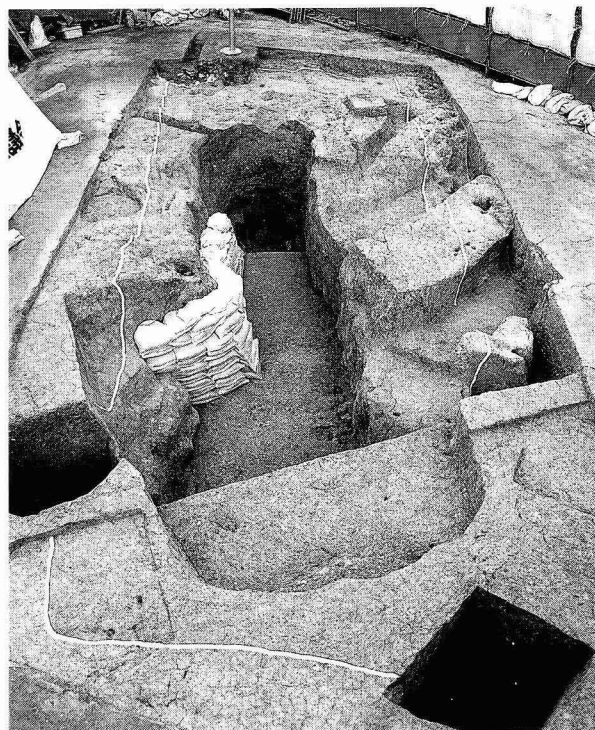
以上の作業をもって調査は終了し、木棺や鉄刀など取り上げずに残した遺物は、保存処理を施して埋め戻した。

3. 出土遺物について

今年度、第1主体部の盗掘坑の覆土から出土した遺物は、ほとんどは副葬品として、棺内外に納められたものであるが、いずれも盗掘を受けた際の破損が著しく、原形を留めているものは無い。内訳では鉄製品がその大半を占めており、明らかに同一個体となるものは除き、昨年度の盗掘坑トレンチ出土分を合わせて50点以上にのぼる。種類が判明したものとして、鉄刀、鉄鏃、鉄剣が挙げられる。また、盗掘坑からは碧玉製の小型の勾玉が1点出土し、玉類は昨年の第2主体部より出土した管玉について2点目である。

その他、覆土からは、夥しい粒子状の朱のほか、家形埴輪の破片1点、円筒埴輪破片が数点出土している。埴輪の出土は少ないが、かつて墳頂に家形や楕形など器財埴輪が立ち並んでいた様子を彷彿とさせよう。

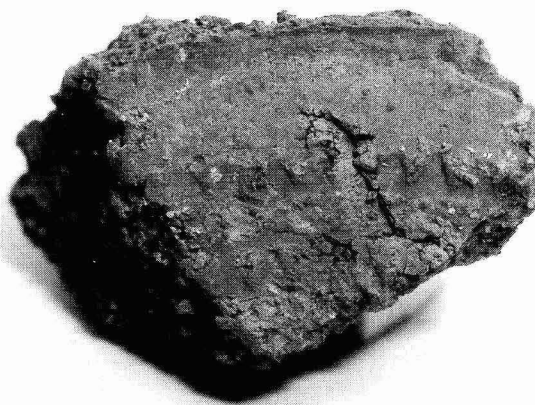
また、盗掘坑南端部に開けたトレンチで、棺床に穿たれた穴からは、倣製と思われる銅鏡の、鏡面と鏡背の模様それぞれが写し取られた粘土押型や、黒色の漆皮膜だけを残した楯の破片が粘土塊に貼り付いた状態で複数出土している。鏡は平縁の外縁に2重の鋸歯文とその内側に波状文がめぐっていることを観察できる。楯は、一部の破片に鋸歯文を構成する斜線が見受けられるが、劣化が進み、また個々の破片が小さいこともあって、文様や大きさなど全体像を掴むまでには及ばない。これら遺物が出土した穴は、周辺の棺床に朱がよく残されていること、鏡の粘土押型がまとまって出土したことなどから、盗掘の際、棺床に副葬時の原位置をある程度保って貼りついていた鏡を、掘り起こすために穿たれたとも考えられよう。



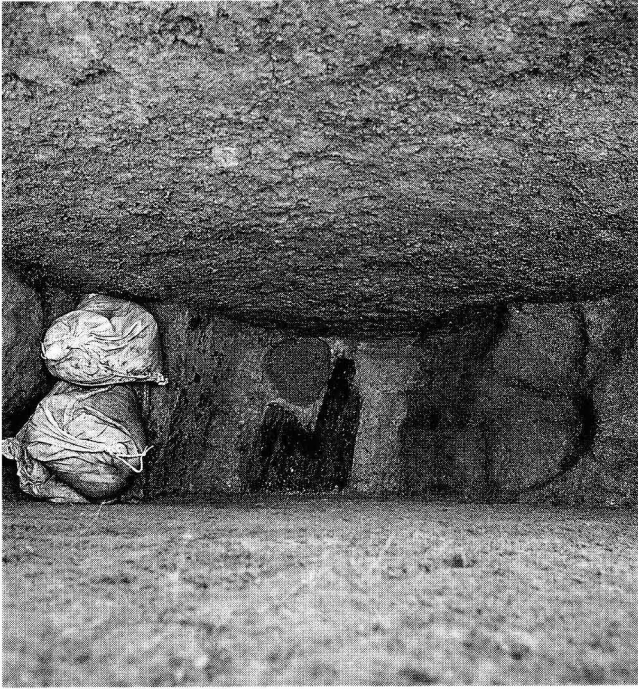
第1主体部盗掘坑 掘削後の状況



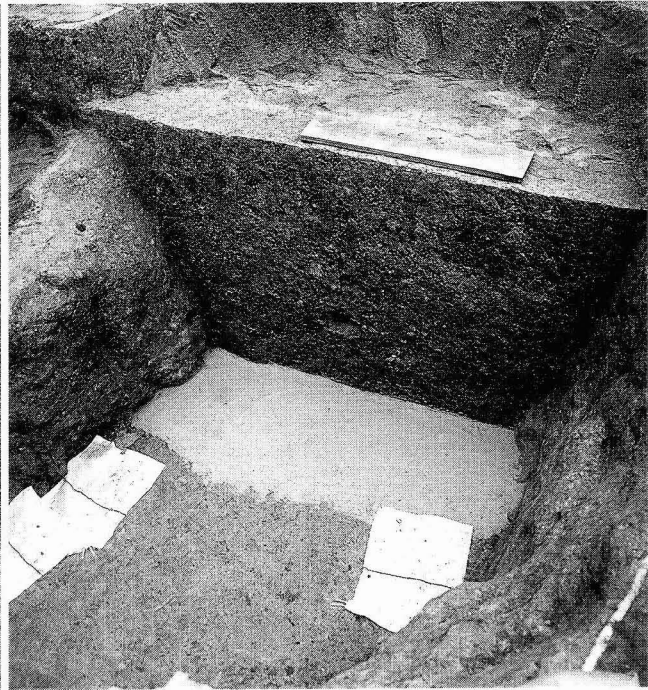
盗掘坑南端部のサブトレンチ



銅鏡粘土押型（鏡背部分）



木棺の再検出状況



木棺を棺床肩部まで埋め戻した状況

4. 遺物の保存について

今回の調査で出土した遺物は、鉄器や有機物など保存処理を前提にしているものが大半を占める。取り上げたものは調査終了後、すぐ処理に取り掛かったが、一方で木棺など、取り上げができなかった遺物は、橿原考古学研究所・奥山誠義氏の指示のもと、遺物の種類、性格に見合った保存処置を現地で行い、埋め戻すこととなった。

(木棺) 今年度再検出された第1トレンチ内の割竹形木棺の棺身は、棺の保存状況や周囲の環境を分析し、入念な検討をした結果、掘り上げた盗掘坑覆土を細かくグラインドして、水を配合してペースト状にし、コテで棺材を密封して塗り固めるという方法が発案・起用された。棺身は棺床の肩部まで、この方法で埋め戻された(上右写真)。また、これに先立って、棺表面にシリコン樹脂を流し込んで型を取る作業を行い、展示等で活用するためのレプリカ製作にも備えた。

(鉄器) 盗掘坑の覆土掘削の最深部において、棺床外の位置で検出された鉄刀は、石油系有機溶剤で溶かしたアクリル樹脂を、1日2回、数日にわたって露出した部位に塗布し、酸素の遮断をはかったうえで、埋め戻した。

取り上げることができた銅鏡の押型粘土や、漆皮膜を残した楯についても、今後時間をかけて奥山氏の指導で保存処理がされていく予定である。

また、盗掘坑より出土した鉄器類は、すべて劣化の進行が著しいため、外部専門研究機関に業務委託して、クリーニング、脱塩処理を施したのちに樹脂含浸、復元、樹脂塗布という工程での保存処理を実施していく予定である。

5. まとめ

この4次調査は、第1主体部墓坑に大きく無残にも穿たれた盗掘坑の覆土から、遺物を採取するという根気のいる作業に終始した。取り出せた遺物は、その種類こそ判明するものがあるものの、いずれも原形は留めてはいない。しかし、まだ調査経験の少ない馬見丘陵古墳群南部の中期古墳の実態を把握する上で、今回の埋葬主体の情報を含めた一連のかん山古墳の調査成果は、貴重なデータを提示してきたといえよう。